

# 神託が下りまして、 今日から神の愛し子 です!

最強チート承りました。

では、我慢はいたしません!

● 著 しなのめあき



### ブライアン・ランドル

専属護衛騎士の一人。  
リーゼロッテを「姫様」と呼び、  
忠誠を誓う。

### アンナ

リーゼロッテに仕える侍女。  
明るく真面目。  
魔法が使えないのが  
コンプレックス。

### セシル

リーゼロッテの  
専属執事。  
仕事はそつなくこなすが、  
たまに毒舌。

## 登場人物紹介

### クリスティア・ フォン・ローゼバルト

ローゼバルト公爵夫人。  
家族を優しく見守る  
穏やかな母で、  
リーゼロッテの言動に興味津々。

### リアム・フォン・ ローゼバルト

ローゼバルト公爵家の  
当主で王国の宰相。  
リーゼロッテを溺愛する、  
仕事も見た目も完璧な父。

### シエル

守護獣のフェンリル。  
神様から遣わされて  
リーゼロッテに仕えている。  
犬扱いされると怒る。

### リーゼロッテ・フォン・ ローゼバルト

ローゼバルト公爵家の末娘で、  
前世の名前は楠木あかり。  
転生時に愛し子として  
チート魔法を授かる。

## 誓いのキスを

「では、誓いのキスを……」

神父様にそう言われて、愛しい彼と見つめ合う。

そう、親族や友人に見守られて、今、私は幸せの絶頂のはずだったのに――

唇が触れ合うはずのその瞬間、逆バンジーのように、身体が引つ張られる感覚に陥ったのだ。

「えっ!? ……ええええっ、ひ、ひやあああああ!?」

喻えようのない感覚が身体を駆け巡る。急にフワツとした浮遊感? 無重力感? を覚えた。そ

して、恐るおそる目を開けると、真っ白な世界に、文字通り浮かぶ私。

はい? え?

結婚式は?

……まさか、興奮しすぎて倒れた??

だとしたら相当間抜けな……

この日の為に、あれほど準備をしておいて、当日がこれって。そんなのってない。

彼とも喧嘩までして、納得いくまで何度も話し合っ、満を持して今日を迎えたのに。そもそも、私は人生において、倒れたことなどない健康優良児のはずなのに。

結婚式の新婦なんて、多くの人にとって、今自分がこの世界で一番幸せ！　って状態でしょ？　それがまさか人生最大の黒歴史になるなんて、数秒前までは思いもしていなかった。

突然倒れた新婦に会場は騒然としていることだろう。

え、白目むいていたりとかしないよね？

新郎の彼には、トラウマを残してしまったに違いない。

考えれば考えるほど、目覚めた後が怖くなる。

早く目覚めたいけど、目覚めたくない。

いやいや、目覚めたらウエディングドレスで病院とか目も当てられない。

親友にブーケを渡してあげる約束もしていたのに。結婚式で倒れた新婦のブーケなんてもう必要ないだろうな。

……考えれば考えるほど、嫌すぎる。

私、楠木あかり。

二十八歳。

本日、三年の交際を経てゴールインした彼氏との結婚式の最中、誓いのキスを交わすことなく、意識を飛ばしてしまった不運な女だ。

キョロキョロと、周りを窺っても何も無い。

真っ白だし、私一人がただ浮いている。

ホントに何も無い。上下左右も分からない。

浮くことしか出来ない私は、この後、目が覚めて同じく不運な彼氏、いや、旦那か。彼や出席者への謝罪の言葉を考えることにしたのだが……

「ごめんなさいっ！」

そうだよね……シンプルにそれしか言えないよね。

って、え？　今の、私の声じゃないよね？

「すまぬのう。色々な事故が重なったようじゃ」

さらにおじいさんらしき声がした直後に、周りに現れた八人。

え？　何、怖い。どうなってんの！？

「実は、私がある魂を運んでいるときに、地球という星に落としてしまって……」

ピンクの髪色をした女性が言う。最初に「ごめんなさいっ！」と発した声の主だ。

え、魂？ ……落としたの？ 魂を!?

……え？

緑の髪色をした男性が、さらに意味不明な言葉を続けた。

「……そこで、僕が受け止めようと手を伸ばしたら、誤って手がその魂をズボツと突き抜けてしまつて。魂も驚いたのだろう。真下にいた君の身体の中に逃げ込んだんじゃないんだ」

つ、突き抜けたとは……？ 想像したらちよつとグロイ。

おまけに、私の身体に入っちゃつた……??

青髪の男性までもんでもないことを言い出す。

「それを見た俺が、引つ張り上げたら、その……君の魂で……」

そしておじいちゃんが再び出て来た。こちらは白髪の仙人のような見た目だ。

「儂が慌てて交換しようとしたら、間違つて入つた魂が、ちよつど誓いのキスを受けたタイミングだった。そこで、運悪く魂が定着してしまつてだな……」

さらに黒髪のイケメンが目を伏せながら、

「その事故を食い止めようと手を伸ばしたのだが、神々が同時に貴女<sup>あなた</sup>の魂に触れてしまつたせいで、前代未聞レベルの加護が貴女に与えられてしまつて……」

待つて、待つて。

聞けば聞くほど意味が分からない。そして赤髪の男性が不穏<sup>ふおん</sup>な言葉を発する。

「申し訳ないが、地球には帰せなくなつてしまつた」

地球に帰せないって、どういうこと？

金髪の男性が頭を優雅に下げた。

「誠に申し訳ない」

紫髪の男性もすまなそうに言う。

「そこで君には、別世界で生まれ変わつてもらうしかないなど……」

彼が、私に理不尽なことを呑ませ<sup>の</sup>ようとしているのは理解した。

黒髪イケメンがさらに付け加える。

「とんでもない加護が付いてしまつたから、バランスを取るために、あまり発展していない世界に送ることにはなつてしまうのだが……私達八神全ての加護が付いているから許してくれ」

そうして私を囲む八人……いや、八柱と数えるべきかしら??

「えつと……つまり、これは夢ではない?」

「現実に来た、不慮の事故だのう……」と白髪の神様。

「……そんな事故あるのっ!？」

思わず叫んでしまった私は悪くないはず。これが現実で、周りにいる人達が神様であつたとしても、多少の無礼は許してもらいたい。

こんなの、事故なら仕方ないか——では絶対に済まないでしょ！

「ちょ、ちょっと待って！　そもそもこれは現実で貴方達は本当に、その、神様なの？」

私の疑問はもつともだと思っただけ。ピンク髪の神様が答える。

「そうよね、ごめんなさいね。こんなこと初めてだったから、言いたいことばかり言いすぎたわね。私の名前はリリアーナ、魂を選定して運ぶのが仕事なの。運びながら魂を浄化するのよ。疲れた魂を元気にして、前世の善行の分だけ愛されるように祈りを込めて、次の生に備えてもらうの。強いというなら、私は愛の女神といったところかしら？」

リリアーナ様は、出るとこは出て、引込むところはキュッとくびれていて、とんでもない美女。確かに愛の女神の肩書きはピッタリだと思つた。おじいちゃんの神様が口を開く。

「おいそれとは信じられないじゃろうが、残念ながら現実じゃ。そして僕は地を司る神で、名をマクロトと言う。僕は大きめに言えば、大陸を生み出したり、沈めたりと地形に作用する力を持つておる。ちなみに、そこにおる緑髪の奴は自然を操る神じゃ。大地と自然は似ていると思うかもしれないが、別の神が司つておつてのう」

マクロ様がお鬚を撫でながら、自分の仕事について説明してくれた。

「マクロ様つてば、勝手に僕の説明しないでよ！　しかも中途半端に！　マクロ様に言われちゃつたけど、僕は自然を操るんだ。名前はファム。よろしくね！」

緑髪のファム様は、若くちよつとシヨタっぽい感じだ。

自然を操る？　あんまり聞き慣れない表現だわ。青神の神様が割り込む。

「分かりやすく言つてあげないと。ファムは四季を司つていて、四季の移り変わりの取り決めをしているんだよ。そして俺の名前はラビ。見ての通り水を操るんだ」

見ての通り、ね。青髪だからつてことかな。続いて赤髪の神様。

「私の名は、ファリス。ラビが見た目通りと言うなら、私もそうだろう。火を守護している」

赤髪ですもんね……髪色でカテゴリー分けされていいのかな。次は紫髪の神様だ。

「ワタシの名は、クラリス。夜の帳を下ろして人々に安息の時間を与えている。君も暗くなれば眠くなるだろう？」

「そうですね、部屋が明るいと眠れない性質なので」

紫髪のクラリス様の問いかけにそう答えると、彼は満足そうに頷いていた。

「そして、私はサンズ。クラリスと対になる、陽を昇らせ、人々に活力を与える存在だ。君も陽光は好きだろう？」

「お日様の光を浴びると、一日が始まった気がします」



## そして、三歳の私

「……っはー」

スカイダイビングのせいで、心臓がバクバクした状態で飛び起きた。

深呼吸吸って落ち着くと、真っ暗な中に、薄らと色々なものが見えてきたのだが……

今、私が寝ているベッド、天蓋付きベッドというやつではなからうか？

子供の頃憧れたんだよね。お姫様みたいな天蓋のベッド！

ベッドから下りてみようと、端まで移動してみて気付く。

このベッド、めちゃくちゃ大きいぞと。そして、床に足がつかないぞと。

どんな巨大なベッドかと思ったものの、自分の手足を見て思い出す。

三歳の誕生日に記憶が戻って言ってたっけ？——つまり、私は三歳なのか。

神様達と話していたのは、ついさっきのような気がするけど、すでに三年の時を生きていたら  
し。

記憶が二十八歳のものだからなのか、思った以上に冷静に受け入れている自分に感心してしまう。  
枕や掛け布団をベッド下に投げ落とし、足場にして跳び下りると、着地と同時にバランスを崩し、

オデコから床にダイブしてしまった。

「……いてて」

オデコをさすりつつ、口から発せられた己の可愛い声にキュンとした。

……ナルシストではないのであしからず。三歳児が可愛くないわけがないでしょう。

イヤイヤ期？ それすら可愛いでしょう！

改めて見回すと、ベッドも大きい、部屋も広い。

日本で住んでた1LDKのアパートよりも広く感じる。

「めちゃくちゃお金持ち過ぎん??」

と、呟いたと同時に、この三年間の記憶がブワツと溢れてきて、ジェットコースターに乗ったよ  
うな気分になった。

逆バンジージャンプに無重力、そこからスカイダイビング、そしてジェットコースター。もう絶  
叫系はお腹いっぱい。

「……うう。転生ってアクロバティックなのね」  
起きたばかりなのに疲れた。

とりあえず、今日に至るまでの三歳分の人生を思い出す。



私の名前は、リーゼロッテ・フォン・ローゼバルト。

ローゼバルト公爵家の娘。

元日本人の私にはなじみの薄い名前と貴族籍だけど、「公爵」は王家に連なるお偉いさんであることくらい、流石に知っている。意味はふんわりとしが分かってなかったものの、前世の記憶にもちゃんとおる。

ローゼバルト公爵家では、先代国王のお姉様が降嫁されてお父様が生まれているので、私のお祖母様が元王女様のようだ。お祖母様と言っても五十歳前後。五十歳って、前世の母親と同じくらいの年齢だったはず……

「お母様の年齢は、前世の私とあまり変わらない……複雑」

今の私には兄が二人いることも思い出し、私が大学で楽しんでいた頃にはもう第一子がいたなんてと思うと、貴族ってすごい。

目覚めてから部屋中を探索して、流石公爵家の屋敷は広いなと思う（いや、詳しく知らないけど、王族に連なるって、国でも上位のお金持ちってことだろうな）。ソファに座ったところで、控えめなノックが部屋に響いた。

「……お嬢様？ 物音がすると護衛騎士から報告がありました、起きてらっしゃいますか？」

やばい！ ゴソゴソしすぎたかも。

「……目が覚めちゃって。うるさくしてごめんなさい！」

そう答えた瞬間、勢い良く扉が開き、廊下の明かりが射し込み、眩しくて目を細める。

彼女は……記憶の中にある——私付きの侍女アンナだ。

アンナは飛び込んで来たかと思うと、私の顔を覗き込んだ。

「ああ、お嬢様！ 愛し子として覚醒なされたんですね！ おめでとうございます！」

涙を浮かべ、私の前に跪き、両手をギュッと優しく握ってくる。

い、愛し子??

……何、それ??

記憶にないぞ。

「えっと……アンナ？ 愛し子って……」

アンナに聞いてみたものの、私の声が聞こえないほどに興奮しているみたい。

「旦那様と奥様にお知らせして参りますので、お嬢様、少しお待ちくださいね！」

ハッと顔を上げ、そう告げたアンナは、競歩のように足早に部屋を出て行ってしまった。

愛し子？

そんなこと、神様から聞いてくれない？

加護は貰えるって聞いたけど……  
ちょっとなじみのない設定は、勘弁して頂きたいのだけど……

アンナが出て行って数分後。

困惑気味の私の元へ、金髪イケメンとプラチナブロンドの美女が数人の供を連れて来た。この二人のことは一番鮮明に記憶にある。私のお父様とお母様だ。

「リーゼ！ 私が誰か分かるかい!?」

「ああ、リーゼ！ 身体の具合はどうなのですかっ!」

二人が私の顔を覗き込みながら口早に尋ねてくるので、一呼吸置いて答えることにした。

「お父様、もちろん分かります。リアム・フォン・ローゼバルト公爵。私のお父様です。お母様、体調は悪いところはございません」

……違和感はあるものの、両親を真似て貴族然とした言葉遣いで答える。そしたら、いきなりお父様から力強く抱きしめられて、息苦しさを覚えた。

「ああ、愛し子の覚醒とはこれほどのものなのか!」

「我が娘ながら、神々しく感じますわ! リーゼ! おめでとう!」

お父様の抱きしめる力はさらに強まるし、お母様はポロポロと涙をこぼすし、愛し子とはなんな



んだっ！

そして、それよりも。

「お、お父様！ 苦しいですわっ」

物理的に息が止まりそうである。また神様達に会うことになってしまいそう。

「す、すまない！ リーゼ！ 大丈夫かい!?」

お父様が慌てて放してくれたので、酸素を肺に取り込み、一呼吸。お父様へ向けて大丈夫の笑顔  
を向ける。

「お二人共、愛し子とは……なんででしょう?」

そして今一番の疑問をぶつけてみた。

「愛し子というのはね……」

金髪イケメンパパからの説明をまとめると、私が生まれたその日、王城に神様が降り立った。そ  
して、

『ローゼバルト家に今しがた誕生した女兒は、神々から寵愛を受けた愛し子である。慈しみ育  
てよ』

と、国民全員に声が届くよう、神様が言ったそうだ。

そして、覚醒は三歳の誕生日である、とも。

さらには、国が栄えるも滅びるも、私にかかっている——みたいなことを言うものだから、国に  
とって諸刃の剣ならば、愛し子の存在は危険ではないかと声高に訴える重鎮も現れた。そうしたら、  
彼の足元スレスレ、さらにはお家、血縁関係のあるお家にまで雷が落ちたそうで、それ以来、国を  
挙げて私を見守る方向で満場一致したらしい。

いやいや、脅迫ですよん……

それ、私が最低最悪の我儘で性格難に育ったら終わるやつでしょ……

神様も、そこまでしてくれなくても大丈夫なのに……

それでも、平和(?)に三年間生きてこられたのは神様と家族のおかげだろう。

ありがとうございます。感謝です。

そして、お父様の説明が終わり、理解しつつもため息が出た。お父様の説明をまとめると、

・【覚醒】つまり記憶が戻れば、幼児のような話し方ではなくなる。

そりゃあ、脳内は成人済みですし……

・様々な知識を授ける存在になる。

日本での知識を上手く活用しろということかな?

・神々の寵愛を受けているので、魔力量が豊富である。

――魔力？ 魔法が使えるのは、年甲斐もなくワクワクすつぞ。

・誰をも虜にするほどの整った容姿（今の見た目は三歳だけど）。

これは両親の遺伝子のおかげじゃなからうかと。私と向かい合った両親の顔は、拝みたくなるレベルの美男美女だもの。きつと、そう。

と、まあ、記憶が戻ったばかりの私には、過剰な期待を寄せてくる周りの視線が痛いわけで……今、確認出来ることといえば、幼児らしくない話し方だけでもね。本当に私にそんな力があるのかどうか、さっぱりだ。

これからのことを考えると、本音では気が重い。

難しい顔をしていたからか、急に言われても困るだろう、まだ夜中なので日が昇るまでゆっくり眠りなさいと、お父様が抱き上げてベッドに寝かせてくれた。

お母様がそっと私の頬に手を添えると、反対側の頬にキスをして柔らかな笑顔を向けてくれる。

……記憶は戻ったし、思考回路も幼児に引っ張られている感じはない。

けれど、なじみのないそのおやすみの挨拶に、胸があったかくなり安心感が広がっていく気がした。

「おやすみ、我家のお姫様」

「おやすみなさい、愛しいリーゼ」

「……お父様、お母様。おやすみなさい」

両親の優しい声に、朝になるのを待とうと思い、ひとまず目を閉じるのだった。

## 改めておはようございます

「お嬢様、おはようございます。本日はお嬢様の誕生日パーティーですので、しっかりとお支度<sup>しだく</sup>をさせて頂きますね！」

アンナの声に、パチリと目が開いた。

……三歳ってこんな感じなの!?

寝起きのダルさを感じることなく、目が覚めるなんて！

目覚ましアラームと格闘<sup>かくとう</sup>していた前世の自分は何だっただんだと思うほどに、身体が軽い。

これが三歳！ 若い身体（若すぎるか）！

「失礼します」

と、アンナに抱き上げられて、私室内のバスルームに連れられて行くと、ホカホカと湯気が立った猫足バスタブ前で下ろされた。まずは身体を洗うらしい。

あれよあれよと脱がされ、私はバスタブの中へ。

アンナが小さな黄色い塊を濡らして擦<sup>こす</sup>ると、申し訳程度の白い泡が……残り少なくなった洗顔フォームのチューブを絞り出したものの、全然足りなくて泡立たないときに似ている。

その泡を身体につけられ、マッサージのようにアンナに揉み洗いされる。

三歳の私には、くすぐったいだけなのだけ!!

「つ……きやははっ」

思わず出た笑い声は、幼児ならではの高い笑い声で――

「お嬢様、我慢なさってくださいね」

と、申し訳なさそうにしつつも、口元はにつこりしたアンナが、私の顔を覗き込んできた。

「ご、ごめんなさい。くすぐったくて」

「お嬢様。使用人にするように謝って頂く必要はございませんよ」

でもね、アンナ。

「私は自分が悪いなら謝罪を、嬉しいと思ったなら感謝を、ちゃんと言える人間でありたいわ」  
これは前世の私が、おばあちゃんからずつと言い聞かされていたことである。

「失礼いたしました」

アンナはそう言いつつ、どこか感極<sup>かんきょく</sup>まった表情で私を見た。

「うん。アンナは私の立場を考えて言ってくれたのでしょうか？ いつも感謝しているわ。ありがとう」

「お嬢様……!」

思い出せる記憶の中では、いつもアンナが私の傍にいてくれたことを確認済みだ。  
アンナは、頬を赤らめながら私を見つめたかと思うと、ハツとした表情になった。

「お湯が冷めてきましたので、追加いたしますね！」

と、熱湯が入った桶と、水が入った桶を混ぜ合わせて、温度を調節しているようだった。

「少し高めの温度に調整しますね」

アンナは混ぜ合わせた桶に手を入れ、湯加減を調整しているのだが……

「……いつもそんなに大変なの??」

聞き方をミスったかもしれない。

今までの三年間だって、ずっとこんな苦勞をしてきてくれたはずなのに、今日初めて目にしたように思われないかな。

私の問いかけに、アンナは酷く申し訳なさそうな顔で、頭を下げてきた。

「お嬢様、申し訳ありません。覚醒されて気になられたのですね……私は、伯爵家出身の人間ではありませんが、魔力がなく……奥様の侍女のアリアーナであれば、水魔法を扱えますので、このようにお待たせすることもないのですが。アリアーナでさえ、浴槽にお湯を張るのは結構な魔力を……」  
そのことを聞き、今までのリーゼロッテとしての少ない記憶をたどる。

この世界には魔法が存在している……ただ魔法があると言っても、それを使えるのは上位貴族だ

けで、その中でも魔法を実用出来る者は、一握りにも満たないとか、なんとかかんとか。

お父様が魔物討伐の際に火の魔法を使用し、魔力枯渇で危なかったとお母様が泣きながら怒っていたのを思い出した。そのときにそんなことを言っていた気がする。

お父様の魔力量が少ないわけではない。むしろ、お父様の魔力量は国内でも多い方なのだとお母様が言っていた。

『魔法を使える上位貴族としての務めなんだよ』

『確かに魔法を充分に使えるのは、上位貴族の中でもほんの一握りかもしれない。だからって、貴方ばかりあてにするのはおかしいわ！魔法を使う必要がないように準備をするべきだったのよ！』

『仕方ないさ。急な襲撃だったのだから』

『貴方の魔力量は国内でも多いのよ？それを枯渇寸前まで使わせるなんて!!』

——みたいな会話を二人がしていたのを、アンナに抱かれながら見ていた記憶がある。

「……そうよね。もっと便利になればいいわね」

魔力量が豊富な私が、考えるべきことの一つなのかもしれない。

こういった問題の解決も、国が栄えることに繋がる可能性があるもの。

黄色い塊のような石鹸を泡立てるのも大変だし、匂いは決して良いとはいえないし、身体と同じもので洗うから、髪なんてキシキシするし。

あんな風に、お湯を桶で運ぶのも重労働だろう（厨房でお湯を沸かして、各部屋まで使用人が運ぶそうだ）。

そういうえば、神様があまり発展していない世界って言うてたなあ……

とりあえずは、この家の人達に喜んでもらえるようなことが出来ればいいのだけど。

まだ起きたばかりで、自分の状態もしっかり把握出来ていない。誕生日パーティーを終えたら、色々試してみようと私は心に決めたのである。

アンナの手によってフリッフリのドレスを着せられ、髪の毛をリボン付きツインテールにしてもらって準備は万全！

ドレッサーの前で見た自分の姿は、控えめに言って天使でした……

私、可愛すぎる。容姿チートであることは間違いないかった。

お母様譲りのプラチナブロンドは、香油かうゆのおかげでツヤツヤ。

大きくて、少し垂れ目がちの瞳はアメジストのような紫色で庇護欲ひごよくをそそる。

スツと通った鼻筋に、唇は薄すぎず厚すぎず、ふっくらプルプルの桜色。幼児特有のふっくらとした体形が、さらに天使感を高めていた。

リーゼロッテ・フォン・ローゼバルト。

将来有望すぎる美少女でした。ありがとうございます。

と、天を仰いで神様方に感謝をしていると、部屋をノックされた。

アンナが扉を開けると、家令が頭を下げて、招待客も揃ったのでそろそろお披露目の為に移動をするように、と言った。

そして、家令と一緒に部屋を訪れたのが……

「リーゼ、今日は僕がエスコートさせてもらうよ」

「リーゼ！ 誕生日おめでとう！」

七歳上でお母様似のヴィルフリートお兄様と、四歳上でお父様似のエドワードお兄様。私は親しみを込めて、それぞれヴィルお兄様、エディお兄様と呼んでいる。

「お兄様！ ありがとうございます！」

「我が妹は、本当に可愛らしいね」

笑顔で手を差し伸べてくれるヴィルお兄様は、十歳のハズなのにこんなに紳士でイケメン。貴族ってすごい。

「兄上、羨ましい！ 僕だってリーゼのエスコートをしたいのに！」

七歳のエディお兄様が、プクツと頬を膨ふくらませて、私のドレスをギュツと握った。

「エドワード様、お嬢様のドレスが皺しわになってしまいます」

アンナが、エディお兄様が握った部分をそっと押さえると、エディお兄様は慌てて手を放した。  
「す、すまない！ リーゼ！」

焦りながら謝るエディお兄様。

「大丈夫です！ エディお兄様、こちらの手をお願いしても？」

ヴィルお兄様にエスコートしてもらっているのと反対側の手を差し出すと、エディお兄様は、笑顔で手を取ってくれた。

「もちろん！」

私とエディお兄様の笑顔を見て、ヴィルお兄様はフツと笑う。

「今日は誕生日だからね。両サイドを固めても問題はないだろう」

玄關の大きなドアを家令が開ける。二人にエスコートされながら、外へ出ると、大勢のお客様が拍手で迎えてくれた。

足元に敷かれた赤い絨毯の上を歩き、その先にいる豪華な服装の男性の前に立った。

「リーゼロッテ嬢。誕生日おめでとう」

と、リボンの付いた大輪の薔薇を差し出され、祝いの言葉を頂いたのだけでも……

両サイドのお兄様はもちろん、周りの人達も頭を下げていること、そして誰よりも先にこの人の元へ参上しているこの状況、目の前の人物はとんでもない人ではないと思に至る。

「リーゼ、陛下だよ」

と、小声でヴィルお兄様がそっと答えをくれた。

やっぱりそうだよね!? 王様だよね!? 王様って言われても日本人としてはピンと来ないけれども、要はこの国で一番偉い人だよね!?

これは普通なのか!?

元日本人としての知識じゃ、判断がつかないし、公爵令嬢といえども物心がつくかつかないかの三歳児の記憶じゃ、全然分らないんですけど!!

貴族じゃ普通のことなの？ 公爵家だからなの？

それとも、愛し子のせいなの!?

「……ありがとうございます」

絞り出したのは当たり前障りのない、ごく一般的なお礼の言葉だけ。

もっと、挨拶の定型句みたいなものはないのかな!? 大丈夫かな!?

内心バックバクの私。差し出された薔薇を受け取ろうと、私の手が王様の手に触れた瞬間、フワッと優しい光に包まれた。そう、文字通りフワツと。月の光を閉じ込めたみたいな銀色の大きなもふもふが私を包み込んでいた。

「こ、これは……フェンリル様！」



目の前の陛下が片膝をつくものだから、周りの人達も一斉に膝（女性はお膝っぽい）をついた。  
《よい。衆にせよ。我はリーゼロッテの守護獣なり。この瞬間より顕現し、リーゼロッテの傍に控えるとする》

人語を話し、私に寄り添うように現れたフェンリルという、大きい狼おおかみのような銀色のもふもふが私の身体にスリスリしてくるので、思わず犬のようにワシャワシャ触ってみる。

フェンリルは、気持ち良さそうに目を細め、ペロリと私の頬を舐めると、また優しい光に包まれた。

《宴を邪魔してすまなかった。時を改めまた参る》

私を見つめてそう言うと、フェンリルは跡形もなく消えてしまった。

「……い、愛し子様。どうか、余に祝福を頂けませぬか」

さつきまで威厳いげんのあった王様は、少し震えた声で、懇願こんがんするように私の前で両手を組む。

ちよつと待つて。国で一番の偉い人がやめて欲しいつ。

そもそも祝福ってどうやってするんだ!!

流石に王様を跪かせたままではまずいと思い両親を見ると、オロオロするお母様と難しい顔をしてお父様と目が合った。

王様が跪いている以上、その他の人達も頭を下げて跪いたままなのだ。

私が頼りに出来るのは、三歳分の記憶だけ。今日、前世の自我が目覚めたばかりの私には、丸つきり対処法が分からない。

お父様が覚悟を決めたかのように立ち上がった。私の傍まで来ると王様に向かって跪き、ゆっくりと口を開いた。

「陛下。娘は本日覚醒したばかりで、まだ困惑しているようです。また日を改めまして、ご挨拶に伺う形を取らせて頂きたく存じます」

お父様と陛下は親戚おかしだけでも、公の場ではしっかりと臣下として接しているようだ。その言葉を聞いた王様は、小刻みに頷いた。

「愛し子様、貴女様のお気持ちも考えずに申し訳ありませんでした。是非、改めて城にお越し頂きたく」

王様の言葉遣いにギョツとする。お父様が敬語を使っている相手が、私に向かって敬語で話しかけてくるなんて。しかも、私は三歳児。

「ふ、普通に！普通に接してください!!」

心の底からそう叫んでしまった私に非はないと思う。

お父様と私からの説得により、なんとか威厳ある態度に戻ってくれた王様と離れ、次は家族みんな

なで用意された席に着いた。

参加してくれた方々の挨拶を受けると聞いて、ちょっとうんざりしたのは内緒。

だって、この広い庭いっぱいの人、人、人なんだもん。

この人数に今から対応するってことでしょ？

お父様でさえ、ちよつと顔が引き攣<sup>ひきつ</sup>っていたのを、私はちゃんと盗み見たし。

神託のあった愛し子の誕生日パーティー兼お披露目とあって、それこそほぼ国中の貴族が参加している<sup>と</sup>両親が話していた。

公爵家と繋がりを持ちたい家なんかは、私と同年代の子供はもちろん、お兄様二人に合わせた年の子供も連れて来ている。ギラギラしたオーラで、今か今かと自分の挨拶の番を並んで待っている。少し、いや、かなり怖い。

お兄様達も引き攣<sup>ひきつ</sup>った笑顔で、娘さんを紹介されるのを受け流す。

挨拶は、最早<sup>もはや</sup>流れ作業となっていた。上位貴族から始まり下位貴族へと順番が移っていくにつれて、子供が私の付けているリボンを欲しがったり、お兄様の手を握ろうとしたり。親が真っ青になりながら謝罪と共にフェードアウトして行くことも少なくなかったので、後半は早く終わったように思う。

なんとか挨拶を受けた後は、お待ちかねの食事タイム。

各テーブルに運ばれたお料理に、流石公爵家だと賛辞が聞こえてくるけれど。

……まさにナチュラルなお味である。

ステーキは、良いお肉だけでも味付けが、本当に少々のお塩のみ。

パンはロールパンにしては硬めのパン。

お野菜は新鮮ではあるものの、素材の味が全く生かされていない。これまた少々のお塩。

スープは、薄めの牛骨スープ??

いや、違う。お肉の味がするだけだった。

調味料はどうした？ 状態の、基本ナチュラルなお味なのである。

……これは、まず食文化をなんとかしたい。

なんとかしたいと言って簡単には出来ないだろうけど……慣れ親しんだ料理の「さ、し、す、せ、そ」は改善には必須<sup>ひつす</sup>である。

しかしながら、見回せば美味<sup>おい</sup>しそうに食べている人達。私の舌の方が異常なのでは?? と思うレベルである。塩好き世界なの??

パーティーをクタクタになりながら終えて、ようやく部屋に戻るようになった私がアンナから

された話は、さらにぐったりとする内容だった。

「お嬢様、頂いたプレゼントの数々が六部屋分になりまして、明日からしばらくはプレゼントの開封とお礼状を書く作業になります」

「……私、字を書けるのかしら……??」

「お嬢様は、ハッキリとお話しになったのは本日が初めてですが、文字の読み書きについては、すでに習得されているハズですが……?」

アンナが、小首を傾げて不思議そうに答えるのを見て、リーゼロッテの三年間を思い出す。

……確かに、私、文字の読み書きが出来ていたわ。

え、三歳で読み書き出来ちゃうの怖い。

「そうでした。お礼状、頑張ります……」

明日からのお礼状作業に腱鞘炎を覚悟する。楽な服装に着替えた私を抱き上げ、ベッドに寝かせると、アンナは退室して行った。

コピー機が欲しい……切実に。調味料も欲しい……切実に。

疲れて寝る前にこそ、お風呂に入りたい……切実に。

あ、そういえば、フェンリルはどこに行ったんだろ？ また来るって言っていたけど。

と、考えた瞬間に柔らかな光が発生し、気付けばベッドの上にフェンリルが座っていた。

《宴は終わったようだな》

「はい！ もう寝るだけです！」

《そのように丁寧<sup>ていねい</sup>に話す必要はない。この世の創造神によって遣わされたが、創造神の加護を持つ<sup>そなた</sup>其方と我は、いわば対等であるからな》

「……国の重鎮がひれ伏す存在と対等……」

《まあ、この国では、我が種族は神獣とされている。国が違えば我が種族は魔物として討伐対象になる場合もある》

「……なるほど??」

《今のように頭の中で呼びかければすぐに現れる。必要なときは呼ぶと良い》

「便利なんだね……」

《加護の一つだな。それから先ほどの願いだが、其方であればすぐに実現出来るだけの力を持つておろうに》

「……願いつてなんだっけ??」

私、何かフェンリルをお願いしたかな？

《こぴーき。調味料。入浴だったか?》

「ああ！ 確かに切実に欲しいと思ったやつ！」

《こびーきは知らぬが、調味料も入浴も其方が望む魔法を作れば良いのではないか？》

「……つ、創る？ 魔法って創れる……の??」

フェンリルと無言で見つめ合うこと、数十秒。

《……ああ、そうか。其方はまだ幼子<sup>おきなこ</sup>であったな。加護の力が強すぎて、そのようには見えずにつ  
いつい……その為の私の顕現<sup>あらわれ</sup>だったのだな》

フェンリルは、はふうと大きく息を吐く。私の顔をじっと見つめて、顔をゆっくり近付け、額に  
鼻先をくっつけた。

まるで、キスされたみたいだ。その瞬間、じんわりとした温かさにも包まれたような感覚がした。

《魔力の巡りを意識出来たか？ これで願えば意のままに力を使用出来るはずだ。意識を集中すれ  
ば、知りたいものを知ることが可能であろう。自らに對し発動すれば魔力の使い方、応用、創造魔  
法の発動など、すぐに習得出来るはずだがどうだ？》

フェンリルがコテンと首を傾げる姿は、めちゃくちゃ可愛いつて知ってる!?

抱きつきたい衝動<sup>しょうどう</sup>を抑えつつ、言われた通りに、とりあえずこびー機に代わる魔法が使いたい!  
と、願ってみると……《創造魔法<sup>そうぞうまほう</sup>・転写<sup>てんしゃ</sup>》をゲット(?)した!! 創造魔法……?

ひとまず使ってみようと、ベッド横のチェストから羽ペンと紙を二枚取り出す。一枚目に○を書  
いて、二枚目に転写魔法を発動させると、見事に同じ○が写された!!

「やった! これで腱鞘炎回避出来る!!」

《ふむ。面白い使い方をするものだな》

覗き込んできたフェンリルが、フンスと鼻を鳴らした。

「こんな便利な魔法をありがとう!」

《創造神や、その他の神々の加護のおかげだ。創造魔法を使えば、其方の想像力次第で如何ように  
も便利な魔法を創り出せる。このような強い加護は見たことがないがな。とりあえず、今日のとこ  
ろは休め》

転写魔法の成功ではしゃぐ私の首根っこを啜<sup>くち</sup>えて、ベッドに倒したかと思うと、その傍で身体を  
丸めて、フェンリルも欠伸<sup>あくび</sup>を一つ。

あ、一緒に寝てくれるんだ。フェンリルの温かさともふもふのおかげで夢の中へ旅立つのは一瞬  
で、私の転生一日目は終わりを告げた。

## 身の回りから便利に

朝、アンナが来る前に目を覚まして、ベッドに入ったまま半身を起こし、考える。

この広い部屋を改装することは出来るだろうか。

猫足のバスルームはあるもの、お湯を溜めるのは手動だし、洗顔はボウル状の木の桶に入れたお湯を使い、ベッドの上で済ませる。

袖が濡れそうで気になるし、バシヤバシヤと洗い流したい私的には物足りない。

もちろん、それすらも運んで来てもらわないといけないし。

トイレは部屋を出て廊下の端の上に、汲み取りタイプ。おまけに、その排泄物は毎晩使用人が集め、処理用の穴に捨てる仕組みである。

ハッキリ言って、トイレ関係は不便な上に不衛生だし嫌すぎる。

自室にお湯の出る蛇口と、洗面所やトイレといったサニタリールームを作りたい。

腕を組んで、うむむ、と考えてみる。

よし、私は愛し子で創造魔法が使えるのだ。これは、ご都合主義で思ったままにやってみよう。

ベッドから飛び下りて、バスルームの扉を開ける。

無駄に広い部屋の真ん中に猫足バスタブがドカッと置かれている。排水口なんかはなくて、濡れた床は使用人が拭いているし、浴槽のお湯は、再び桶で運び出せるだけ運び出し、残りはタオルで拭いている。

重労働なことこの上ない。というか、排水口もないなんて。

御屋敷の排水口は、厨房のみのようだ。排水口といっても、シンクに穴を開けて外に流しているだけの簡易的なもの。私の元いた世界だと、古代ローマ時代にはすでに水道があったらしいけど、この世界の文明はどれくらいなんだろう？

うん。分からないことを考えても仕方ない。

代わりに、想像力を働かせるとしよう。頑張れ私。

この無駄に広い室内なら、バスルームとサニタリールームの併設は充分可能だ。

〈創造魔法・模様替え〉！

安直なネーミングはこの際、気にしないでもらいたい。分かりやすく使いやすいのが優先だもの。〈模様替え〉はその名の通り、部屋をイメージ通りに変えることが出来る。室内をミニチュアサイズに変更出来て、そのミニチュアを削り変えることで、家具の形や配置、部屋の構造を弄れるというチート能力に頼りっきりの魔法である！

まずは、この一室を三つに分けて……向かって左はトイレで狭めに……といっても余裕で二畳分

はあるな。

その隣に、脱衣所兼洗面所のサニタリールームを設置したい。私しか使わないのだから、創造したガラス戸のみで仕切って、引き戸でバスルームへ行けるように、と。

これで部屋割りは問題ないかな。バスルームのいい感じの場所にバスタブを設置して、サイズを修正する。うん。良いね！

次は……

〈創造魔法・モノ創り！〉

頭に描いたモノを創り出せる素晴らしい魔法である（頑張れ、私の想像力と創造力）！

バスタブにお湯が出るように、蛇口を設置！

蛇口と接続したシャワーホースを繋げて、有名だった某シャワーヘッドを真似たものを設置！

思い付く限りの自分好みの洗面台を……設置！

その隣の部屋に温水洗浄便座付き水洗トイレを……設置！

あとはバスタブ、バスルーム、洗面台からの排水をトイレの方へ……繋ぐ！

そして、それらとトイレからの汚水は、トイレ横のタンクに溜まって圧縮、乾燥され、鹿の糞ほどのサイズの肥料を作り出す！

これで排水処理も衛生問題も解決！

清潔、便利、簡単、リサイクル、良い感じになりますように！——を目標にゴリ押し、創造魔法を駆使して一気に創り出した。

「……ふう」

見た目は、めちゃくちゃ良い感じ！ さながら、高級ホテルのような出来である。

あ、そういえば結婚式の後は、某高級ホテルで一泊して、コアラとカンガルーのいるあの国へ出発予定だったのに……

今更言っても仕方ないか。この世界で楽しく豪華な生活を送ってやる！

話は逸れたけれども、あとは使えるかどうかだ。バスタブへのお湯を出そうと蛇口を捻る……

「……出ない」

洗面所もトイレも試したが、そもそも水が出なかった……

「なんでなのー!!」

《どうした？》

「あ、おはよう……水が出ないの……」

起きてきたフェンリルに、絶望感たっぷりだと答えると、フェンリルは尻尾をパタリと動かして私に向き直る。

《其方……これほどの物を創り出しておきながら、肝心なところが抜けているな。水を供給する機

関がないのでは、水が出ないのは当たり前だろうて……」

「あ！　そうか！　水の供給機関……え、水タンクとかポンプとか？　水はどっから持って来たらいいんだろ？」

確か、屋敷の裏側に、井戸があるんだよね。

そこから、汲み上げてこないといけないとなると、相当な長さのホースやパイプが必要かも？　そんなの屋敷内にあつたら邪魔だよな？　壁の中を通す？　想像力が追い付かないぞ。

眉を寄せて悩む私の足元に、コロコロとビー玉のような透明の石（？）を転がしたフェンリル。

《これで補えばよい》

「……？　何それ??」

《これは、空の魔法石だ。この中に属性魔法を込めれば、込めた魔力が尽きるまで、その属性魔法が作動し続ける。魔力が尽きたならば、また新しい魔法石と交換すれば良い》

「そんな便利な物が！　ありがとう！」

フェンリルに使い方を聞き、ついでに属性魔法について教わる。この世界の魔法には、火、水、土、風、雷、闇、光の七属性が存在する。火が最も多くの人が持つている属性で、この順番で希少性が高くなるらしい。

そもそも、風以降はまだこの国では扱える者が発見されていないそうだ。

いや、発見されていなかった、になるのか。

愛し子の私は、当たり前のように全属性持ちでした。

フェンリルに教わって、水属性を込めた魔法石をバスタブ、洗面所、トイレのタンクと、温水洗浄便座の給水ホースに埋め込むと、見事に水が出た。

お湯にするのは、水魔法の派生で出来るみたいなので、シャワーからは三十八度、バスタブ用には四十度くらい、洗面所と温水洗浄便座には三十五度くらいのお湯が出るように、魔力を込めた。自分にとってちょうど良い温度のお湯が出るのを確認し、ご機嫌な私。

もちろん、カラカラの肥料が一つ出来ていたのも確認したので大成功だ。

「とりあえずこれで、アンナの負担も軽くなるはずだし、トイレ問題も解決かな！」

《其方、身体はなんともないか？》

私が作業を終えたのを見届けて、フェンリルがスツと身体を寄せてくるのだけど……

「身体？　身体は……なんとも……」

言われて自分の身体に注意を向けてみれば、あれ……？

なんとなくフワフワした感じ。お酒に酔ったかのように、足元がフワフワ。

《馬鹿者。魔力が枯渇しかけている。無から創り出しすぎだ。我でも倒れて寝込む量の魔力を、慣

れてもおらぬのに使いよって》

首根っこを啞えられて、ベッドへ強制送還。

そんな制限があるなら、先に言っただけで欲しかった！魔法石を渡してくれたとき、何も言わなかったじゃん！

と、目と思考で訴えかけると、フェンリルは、フイと目を逸らした。それから、

《見たことのない物が出来ていくので、つい観察に徹してしまったのだ。許せ》

と、バツが悪そうに頭を下げた。

結果的に、朝の支度をしに来たアンナに見つかり、両親を呼ばれ、全員に完成品の出来に感動され、体調を心配され、怒られ、非常に力オスな状態になってしまった。

しばらくは、フェンリルの監視の下、魔力の操作方法なんかを学び、万全の状態になるまでは、大掛かりな魔法は禁止されてしまった。

それからというもの、禁止した手前、自分の部屋にもトイレが欲しいとは言い出せず、私の部屋にトイレを借りに来る家族の姿が日常的に見られた。

魔力操作の練習をする中で、お互いの魔力を共有循環きょううじゅんかんさせる為に、フェンリルとさらに強い結び付きを得る契約を交わした。そのとき、フェンリルに「シエル」と名付けた。

名前を付けて契約を交わすのは最上級のものなんだとか。

そして、私の修業が始まったのである。

魔力操作の修業として、私は公爵邸の裏側に畑を創らせてもらい、様々な植物を育てては、調味料研究を始めた。

自室改装事件では、無から創りまくったので、膨大な魔力を使ってしまったが、例えば元々ある作物をベースに別の作物を創り出せば、使用する魔力は微量で済むようである。

つまり、何かしらの食用植物を、よく知っている野菜や穀物などに変化させるには、微量の魔力で出来てしまう。

とんだご都合最強チートである。

それを応用して、木材や土などの資材を畑の横に集めて創造魔法を発動してみると、保管倉庫を建てることも簡単に出来た。

だが、イキナリ現れた倉庫に、また家族や使用人から、心配がゆえのお小言を貰ってしまった。おかげで、十歳になるまでは魔法の使用をやめてくれと、過保護な制限をされてしまった。

その為、目立たないように倉庫へ、時間停止の保存効果と空間拡張効果がある魔法をかけ、収穫した食物をいそいそと保存し続ける毎日になった。

魔法を禁止されてしまった以上、心配をかけない為に魔法はこっそり使うことにした。



禁止の意味？ もちろん知っていますとも。でも使わなくちゃ上手くないでしょう？

ということ、農園をどんどん拡張していきました。

お父様に、農園が欲しいと言えばすぐに対応してくれて、その道五十年、農園マスターのトム爺じいも指南・管理役に付けてくれた。

トム爺には、禁止されている魔法の練習がしたいことを正直に打ち明けて、共犯になってもらうことに。

お父様は、二十五メートルほどの面積をご丁寧に耕たがやしてから使用許可をくれたので、すぐに作業に取り掛かった。

まずは、調味料用作物の栽培から始めることにして、トム爺に植え方を教わる。彼の農園マスターの名は伊達だてではなく、見たことのない植物も葉の形や根の形を見ただけで、育て方を導き出してしまったみたい。

胡椒こしょう、大豆、サトウキビ、わさびに、からし菜、トウガラシ。

魔法で出せば簡単だけどね……禁止されていますから。

気候の問題などは、目に見えないのでこっそりチート魔法の出番である。

私の農園で育つように、場所ごとに適した魔法を持続的に作動させる。

持続的に魔法を使用することで、魔力の増加、操作時のコツも掴みやすくなるというシエルからのアドバイスがあったのだ。

場所ごとに適した魔法を発動することで、熱帯で育つ胡椒と、冷たい湧き水付近で育つわさびが同じ農園で育つ。

胡椒を植えた場所は適した気候になるようにしたり、わさびの場所には湧き水を循環させてみたり、トム爺と相談しながら作り上げた私の農園だ。

日焼けに敏感なアンナに怒られない程度にしか、日中は外で作業が出来ない私の代わりに、トム爺は葉の状況を見て回り、水やり、肥料の調整と尽力してくれてとても助かっている。

収穫出来たら、一番にトム爺に食べてもらおうと決めている。

「お嬢様、肥料の量を増やしてみてもどうでしょう」

マスターなのに、必ず幼い私にもそうやって意見を求めてくれるところがとても嬉しい。

素人で小娘な私をちゃんと農園の主人と認めてくれているのだ。

なかなか出来ることじゃないと思うんだ。

トム爺のおかげで私は、砂糖、味噌、醤油、胡椒、わさび、からし、一味トウガラシを手に入れた。

最初に収穫したときは、舞い上がってまた保管倉庫を創ってしまつて、家族に怒られました。

失敗、失敗、猛反省。

だから、完成品を使うのも魔法解禁のときまでお預けですよ。たまに、ペロツとしちゃうだろうけどね。

料理に使うのは魔法解禁になります。一人だけ食べるとかはありえないから、ちゃんと我慢するつもり。

長い時間あるから相当な量を作れると思うし、我慢した分きつと感動もひとしおなはず。

十歳になって魔法解禁されたら、すぐにみんなに料理を振る舞おう。

そのときを楽しみに、今日もせっせと農園と保存庫を往復するのですた。

## さあ、異世界ライフを満喫し始めましょう！

「長かった……」

魔法禁止令を出されて七年。

ようやく十歳になり、私は自由に魔法を使っている年齢となった。

なぜ十歳だったのかというと、魔力持ちの人の体内にある魔力機関と呼ばれるものが完成すると言われている年齢が十歳だからだそうだ（こっそり毎日、魔法を使って色々してきたのはもちろん秘密である）。

三歳のお披露目パーティーでうんざりした私は、それ以降の誕生日はホームパーティーのみでお願いしていた。他家からの招待も、修業を理由に全てお断りをしていたので、私は箱入り娘として有名ならしい。

まあ、社交とか貴族同士の繋がりとか、そこらへんは、十五歳から通わなければいけない学園に行ってからでも遅くないだろう。

愛し子という立場である為、王様にだけは何度か会いに王城へ行っていたせいで、三人の王子の婚約者に内定しているのだろうと勝手に思われているのとか。